



## IX

さらしなの里に縄文まつりが根付いたのはなぜ？

大谷善邦

縄文研究の第一人者で国学院大学教授の小林達雄さんによると、縄文時代に初めて「老いの価値」が発見されました。「老いの価値」というのは、人生を長く過ごすことでしか得られない知恵や技術のことです。この場合の知恵には人生を全とうする上で、必要な人とのつきあい方も含まれます。

縄文時代の前は「旧石器時代」と呼ばれ、ナウマン象が日本列島に生息した時代です。当時の地球は氷河期のため、人々は動物の肉や植物の食料を求めて移動していました。

しかし、やがて地球は温暖化し、日本は現在のように四季のある気候になります。伴ってクリなどの木の実の豊かな森が育ち、移動せずとも食糧が安定して手に入ることから定住するようになります。

それが今から約一万数千年前、縄文時代の始まりです。この旧石器時代から縄文時代へのライフスタイルの変化が、老人ならではの役割を生み出したのです。

醸成された老いの価値

移動生活では足腰が弱って置いてけぼりにされた老人ですが、定住することで、老人が積み重ねてきた暮らしの知恵が生かされる場ができました。幼な子の面倒は老人が見てくれるので若夫婦は仕事にも専念できます。老人の知恵と存在が豊かに生きていくために役立つようになりました。

動物の狩猟や植物の採集は取り尽くしてはいけないことなど、地域の人たちと子々孫々ともに暮らしている共生思想の土台を老人たちが中心になってつくったのでした。

そして、さらに大事なものは、老いの価値を尊重する考え方が、縄文時代が続く約一万年の間にじっくり醸成され、「文化的遺伝子」として日本人に刷り込まれたこと、と小林さんは言います。時代は弥生に代わり現代まで二千年以上がたちましたが、その遺伝子は日本人に組み込まれ、自然の恵みの枯渇や住民同士のトラブル

など集団生活にありがちな問題の解決に、老人の知恵が途切れることなく生かされてきたのです。

#### 縄文人が渡来人を手なずけた？

こんなことを考えているときに、NHKスペシャル「日本人はるかの旅」を見ました。この番組は二十一世紀の幕開けとなる二〇〇一年の年間企画で、縄文時代を経て現代の日本人が誕生した経緯を人類学をはじめ考古学、歴史地理学、社会学などさまざまな学問の成果を踏まえて明らかにするものでした。

これを見ていて思ったのは、縄文の知恵は日本を救い、そして現在の日本人の行動様式のベースをつくったということです。

今から約三千年前、縄文時代から弥生時代に変わるときの大きな刺激となったのが、主に中国大陸からやってきた「渡来人<sup>とらいじん</sup>」です。この人

たちは水田稲作技術と同時に「戦いの遺伝子」を持った人たちでした。

当時、中国は春秋戦国時代<sup>しゅうしゅうせんこく</sup>。いくつもの国が割拠<sup>かつきよ</sup>した戦乱の時代です。織田信長をはじめ豊臣秀吉、武田信玄、上杉謙信らが登場した日本の戦国時代とは比べものにならないくらいに大規模に戦争が繰り返され、自分の野望を実現するには人を殺して当然という考え方が普通だったそうです。この時代の九州をはじめ西日本の遺跡からは、頭蓋骨に鋭利なものが突き刺さった跡があるなど惨殺されたとみられる人骨が見つかっているそうです。

鉄器などの武器もたくさん持っていましたから、森でさほど争いのない共生的な暮らしを送っていた縄文人はどんどん殺され、追いやられてしまいます。武力で物事を解決するという行動様式は渡来系の人々がもたらしたとされません。

その勢力は西日本から徐々に東日本に及んでくるのですが、東海地方でストップしました。縄文人と渡来人が共生を始めたのです。東海地方の東側には急しゅんな山岳地帯が連なっているため、そう簡単に人間が入り込むことはできなかつたでしょうが、一つの要因として考えられていいと思ったのは、縄文人の「老いの知恵」です。

「戦いの遺伝子」を持つ渡来人を、「共生の思想」を持つ縄文人、特に、長く生きて酸いも甘いも知った老人たちが、長年をかけ「それじゃだめだよ」「豊かに生きるってのはそんなもんじゃないよ」「一緒に生きてみないか」と言い続けたような気がしてなりません。

「和を以って貴し」に代表される聖徳太子の「十七条の憲法」はまさしくその成果、縄文的な価値観の表れとも言える気がします。



高島哲夫さん（左）。縄文まつりの祭壇を工夫して作り上げた

なしに手に入れたものだ、とはつきりいいきれ  
る人がありましたら、申し出て下さい」  
この発言でそれまで強く自己主張していた人  
が口をつぐんでしまいました。  
そして、その後の寄り合いで話が行き詰った  
ときは「暗夜胸に手をおいて…」と切り出す  
と、たいてい解決の糸口が出されたということ



ただ、正論を突きつけるのでなく

そして、それが現代の日本まで連綿と受けつ  
がれてきたことを教えてくれるのが、民俗学者、  
故宮本常一さんみやもとつねいちの名著「忘れられた日本人」で  
す。宮本さんは戦後から高度経済成長期にかけ  
全国を歩いて日本人の伝統的な暮らしを、温か  
なまなざしで記録した研究者です。近年、その  
功績が高く再評価されています。

宮本さんは本の中で、「長野県諏訪湖のほと  
りの村」で戦後聞いた農地解放についての寄り  
合いのエピソードを紹介しています。農地に対  
する愛着、こだわりが強い時代ですから、みん  
なが勝手なことを言い、收拾がつきません。そ  
の中である老人がこう言ったそうです。

「皆さん、とにかく誰もいないところで、たつ  
た一人暗夜に胸に手をおいて、私は少しも悪い  
ことはしておらん、私の親も正しかった、祖父  
も正しかった、私の家の土地はすこしの不正も  
です。  
正論をただ突きつけるのではなく、当事者の  
改心や気づきを待つ。それが双方にとって、ま  
た集団にとって結果的にいい方向を導き出す―  
こうした議論の文化は縄文時代からの遺産と  
言っているのではないのでしょうか。

#### 高島哲夫さんのひと言

これに似たエピソードは更級地区にもありま  
す。

縄文まつりが毎年秋に行われるようになって  
歴史がまだ浅いころ、まつりの企画運営を担う  
縄文まつり実行委員会の会議。

さらしなの里歴史資料館が畑で用意していた  
ネギなどの食材が不足し、足りない食材を提  
供してくれた住民に現金の謝礼をいくら出す  
かでもめ、結論が出ないでいました。そのと  
き、それまで黙っていた農家の高島哲夫さん

(二〇〇〇年、七十四歳で死去) が言いました。「それはひと言、『ありがとう』って言えばいいだねえかい」

この高島さんのまさしくひと言で議論は決着したのでした。地域で生きるにはお金以上に大事なことがある。テクニクで語るな、ということだったと思います。

高島さんのお宅は更級小学校に隣接しており、後で聞いたところでは、戦後、食糧難で子どもたちの食べ物がなく、食材を無償で提供して子どもたちに食べさせたこともあったそうです。高島さんの頭にはそんなことも去来していたのかもしれませんが。

こうした知恵の言葉がいかにして生まれてくるのか。人といやでも一緒に生きていかななくてはならない環境の中で、そこから逃げず、少しでも前向きに生きようとする人間ならではの精神の営みのような気がします。

犯罪の頻発という病理を抱えています。

コロンブスのいわゆる「アメリカ大陸発見」が一四九二年。以来、ヨーロッパ諸国の人たちが東海岸地域に移住し、一七七六年には独立宣言をして、故国とは一線を画した国づくりを始めます。

米国民の多くの家族は一カ所に定住することなく、子どもの世代は開拓民となって移動していききました。ゴールドラッシュに象徴されるように農民、商人、鉱山探検者など多種多様な職種の人たちが西海岸に向かいました。そもそも移民の多くは貧困層であったことから、故国の伝統的な価値観を否定した暮らしを送るようになっていました。

こうした国の成り立ちからして「若さ」「新しさ」が「古いもの」よりも、もてはやされるアメリカの文化は当然と言えます。

開拓時代、親の世代は生地とは違う場所に自

人生、社会経験の浅い若造だと個々人のことに精一杯で手軽な方向に突っ走りがちですが、「老いの力」には全体の利益を考えて、そうした若造を抑制させる力があるのです。

さらしなの里友の会副会長で郷土史研究家の塚田哲男さん(二〇〇七年、七十九歳で死去)は縄文まつりについて「老人から孫の世代までつながる三世代のまつり」とおっしゃっていました。老人、若者、子どもという三世代が協調するだけでなく抑制し合う関係が、まつりの場で表現されてきたのです。

#### アメリカンドリムの危うさ

こうした三世代間の協調・抑制関係がとても弱いのがアメリカです。

アメリカという国は民主主義、若者文化、旺盛な起業家精神といった先進的な側面の一方で、肥満、精神科医の多さ、貧富の格差、凶悪

分の拠点をつくるのに熱心で、ほとんど移動生活とっていいようなライフスタイルですから、縄文時代の前の旧石器時代と似ています。ですから老人と孫というような家族関係が成り立ちにくく、老人が孫を育てるとい文化が生まれにくかったと思います。

つまり、アメリカは突っ走りや行き過ぎを制御する機能がとても弱い精神風土なのです。アメリカンドリームというのは意地悪くいえば何をやってもいいということ、その結果が現在のアメリカという国の病理にもつながっているように思います。

#### 豊かさに内心複雑だった?

しかしながら、アメリカばかりを批判する資格は今の日本にはありません。縄文研究第一人者の小林達雄さんは次のようにも言いました。

「日本の『高緯度経済成長』は老人を暮らし



西沢今朝一さん

の世代は、明治生まれの父母の世代から縄文時代の伝統的な価値観を受け継いでいます。まだ貧しい時代でしたから、そうした価値観を受け継がざるを得ませんでした。

### 得意技を披露できる喜び



塚田哲男さん。縄文まつり開式の辞を述べるのも、さらしなの里友の会副会長としての仕事だった

から遠ざけて実現したとも言える。日本もアメリカと同じように古い文化を消そうとしたことがあった」

高度経済成長とは、敗戦の痛手から立ち直り

つつあった一九五〇年代半ばから、トイレットペーパーの買い占めなどの騒動が起きた石油危機（オイルショック）の一九七三年まで約二十年間のこと。ですから、小林さんの言う「老人」とは明治生まれのお年寄りが中心となります。高度経済成長期以降、日本の社会はそれまでの伝統的な価値観を強く否定したのです。

伝統的な価値観とは「苦労は金で買ってもしろ」「物は最後まで大事に使え」などの教えのほかに、地域を守ってきた農林水産業や寄り合いなど、とにかく顔を合わせて物事を決めていく暮らしも含まれていました。

高度経済成長期を生きた明治生まれの老人たちは、豊かさをありがたく思いながらも内心は複雑だったのではないのでしょうか。

平成も二十年になろうとする現代、「老人」は大正から昭和（昭和）一代、戦前に少く青年期を過ごした世代が中心となりました。幸いにもこ

先に紹介しました高島哲夫さんはまさしく昭和一代の方です。昭和一代の方々はまだ日本では、高齢者の多くを占めていますので、高島さんが発した言葉のような「縄文の知恵」はまだ残っていることになりました。

その知恵が縄文まつりの立ち上げのときに豊かに発揮されたのです。そのときの様子が大橋静雄さんの文章「縄文遺跡はさらしなの里に新たなまつりを生み出しました」（第三章）で生き生きと描かれていますので、お読みください。このほかにも縄文まつりにかかわる年配者の元気づきを少し紹介します。

西沢今朝一さん（二〇〇六年、九十三歳で死去）。西沢さんは大正三年の生まれで、さらしなの里友の会のメンバーで最高齢でした。西沢さんはまつりを支えるスタッフががぶるしめ縄風の冠づくりを担当なさっていました。その縄をなう手つきは、職人芸でひとりでに縄ができ

ていくようでした。縄ないは五歳のときからやっていたそうです。当時の主要産業であった養蚕が終わって冬の間は、朝から晩までずっと縄ないの作業をしていました。

私も冠づくりの場にご一緒したことがありません。私は高度経済成長の只中の一九六一年（昭和三十六）生まれ。縄ないの仕方を知らずうまくいかない私に西沢さんは、ニコニコしながら「こうやってやるだ」とお手本を根気よく見せてくださいました。

縄文編物の体験コーナーを担当なさった山本孝子さん（長野県高山村在住）も戦前の生まれ。昔ならボロと思われる縄文服に、精魂込めてつくった技と愛を見て参加することになったそうです。編物に関心を持つのはほとんど小学校低学年か幼児たちです。

「私はばあちゃん先生」と話しかけて仲良くなりしました。「何に使うの」と聞くと、「花びんう文化は、不幸なことに戦後の高度経済成長やテレビの普及によって衰退していったため、いつのまにかその美意識は廃れていってしまいました」。

しかし、日本人のさらなる高齢・少子化、インターネット、携帯メールなど人間関係を希薄化させる危険性のある「コミュニケーションツール」の隆盛。社会、個人が豊かに存在することを脅かす問題に私たちは直面しています。

そうした課題を克服していくためには、共に暮らす技をベースに当地に今も息づいている「縄文の知恵」が有効なのではないでしょうか。日本人の伝統的な美意識を当地に凝縮させるのに大きな役割を果たした冠着山（姨捨山）、その面前を流れる雄大な千曲川、そしてその里山空間で農業をベースに暮らしを営む縄文スピリットの継承者たち。歴史、景観、人―三拍子

敷き、それともかわいいい写真を貼るかな」と答える子もいて、楽しく接しました。山本さんは昔、大勢の子にミシンの操作を教えていたそうです。

孫の世代にいいところを見せられる。自分が小さいころ見よう見まねで覚えたこと、かつて高度経済成長期、否定された得意技を堂々と披露できるのは、何よりも喜びなのではないでしょうか。

### 場に意志がある

ところで、そもそもなぜ、当地さらしなの里の年配者は元気なのでしょう。 「場の意志」のようなものを感じます。

第1章「さらしなの里ってどんなところ？」で書きましたように、当地には日本の伝統的な美意識が凝縮されていた歴史があります。ただ、月を愛でながら芸術的な表現を楽しむとい

そろっています。

そもそも「更級」の地は、お年寄りの役割が大きく期待されたところです。姨捨伝説です。当地の姨捨伝説は「解けなければ滅ぼすぞ」と隣国から出された難題を老人の知恵で解くことができ、それ以来、老人を大事にするようになったというお話です。

縄文時代からの知恵を受け継いでいるさらしなの里のお年寄りに、縄文まつりがその知恵と技を發揮させる場を提供したのです。いわば、ベストマッチ、これ以上ない組み合わせだったのです。さらしなの里には縄文まつりに魂が入る歴史、伝統的な理由があったのです。

### 縄文の知恵は危機

もう一度、縄文の知恵についてです。アメリカには縄文の知恵に該当するものがありませんが、核という抑止力もっています。これは他

国を抑制させる手段で、自らを律する手段では  
ありません。恐怖、破壊、力によって他国に君  
臨しようという発想が根底にあります。

ヨーロッパ諸国はそれに比べ、キリスト誕生  
以前からの長い歴史を持ち、いずれも自分の国  
土が戦場となった過去を持つ国々です。行き過  
ぎの弊害を頭だけでなく感覚として知っている  
国民性です。ヨーロッパはまた山を隔てて連な  
る国家の連合体です。一本の同じ川がいくつも  
の国を経て海に流れ込むという大陸です。一つ  
の国が暴走することへの危機感が違います。

ヨーロッパ諸国に勝るとも劣らない伝統を持  
つのが日本です。だから、アメリカよりずっと  
いい国だと、おおいに自信を持ちたいところだ  
ですが、それほど楽観的な日本人はそんなにいな  
いでしよう。

共に暮らし、暴走を抑制する縄文の知恵。自  
然を、地域の人間関係を大事にしながら共に暮

らしてきた人たちの出番の時代です。

#### 【主な参考文献】

「日本人はるかな旅5」NHKスペシャル日  
本人プロジェクト編（NHK出版）

「アメリカの若者たち」谷口陸男（岩波書店）

「古今さらしな集」大谷善邦（さらしな堂）

